平成２８年１２月　９日（金）　　京都市立洛風中学校　Ｎｏ．９

洛風だより・ほかほか通信
～保護者のみなさまへ～

みんなに助けを求めて育つ子どもは幸せに

先日、「心の健康・文化フォーラム・子どもと心を育む人間環境を考える―臨床心理士への期待と未来―」に参加し、京都大学高等研究院副院長の松永哲郎先生の基調講演「想像するちから～チンパンジーが教えてくれた人間の心」を聞きました。お話の中で、大変印象深いことの一つに、次のようなことがありました。人間は、母親から離れ、仰向けに寝かすことができます。しかも安定しています。チンパンジーは仰向けには安定しておれないそうです。そのことが、サルたちと人間の大きな違いだそうです。そして、チンパンジーは生まれて約３か月は、母親にしがみついて生活し、自力で乳をのみ、排せつもします。人間の赤ちゃんは、母親から離れ仰向けになることで、微笑みなどの顔の表情や泣き声によって、周囲の大人に関わりや助けを求めています。大人も語りかけ、手をかけます。そこに双方向の信頼関係が生まれます。この丁寧なやりとりが、安心感の土台になります。

また、チンパンジーは一人の子どもが自立するまで、次の子を生みません。子育ては、ほぼ母親が担います。しかし、人間は、上の子どもが幼いうちに、次の子を出産します。母親だけでは負担が大きく、親兄弟、周囲のみんなで育てるのが本来なのだそうです。

何倍も手のかかる子には、何倍も手をかけるのです。そうして、みんなで育てるのです

これは、ＮＨＫ朝のテレビ小説「べっぴんさん」で聞いた言葉です。ヒロインのすみれさんが、仲間４人と子供服のお店を作っていくというお話です。その仲間の一人の良子さんの息子、龍一君が保育園も辞めさせられるくらい手のかかる子として描かれています。叱っても駄目、なだめても駄目、困り果てていたすみれたちに、子ども頃からすみれの世話をしてきた元女中さんである喜代さんが、「何倍も手のかかる子には、何倍も手をかけるのです。そうして、みんなで育てるのです」と語りかけます。その言葉に私もハッとさせられました。

つい私たちは、手のかからないことが良いことのように思ってしまいます。しかし、「手のかかる子には、手をかける」という発想で考えれば、何か工夫が見つかるような気がします。手のかかる子に、手のかからない子となるべく同じように育てていくことは実は無理があります。また、「みんなに手をかけてもらった龍一君は、きっと幸せになれるわ」**というセリフも出てきます。子どもは、手間暇をかけられた分だけ、人を信頼できるようになります。**信じられる人がいること、そのことが幸せなことではないでしょうか。

折り合いをつけることが、心の成長を促す

１１月の「カウンセラーを囲む会～思春期・子育て・学び合い～」では、「中学生の困りごと～晩秋から冬の季節の中で～」をテーマにカウンセラーからお話していただきました。その中で、中学生になっても、時には幼児のように甘えてくることに、どう対応していったらよいのだろうかということが話題になりました。

思春期の子どもが、ある時期甘えてくることはあります。特に不登校を経験した子が、回復期になるとみられることもあります。そこでは、できるだけ応えてやることが大事です。しかし、親も家事や仕事もあり、兄弟もあり、要求通りに応えていくことはとても難しいことです。そこで、１００％の要求に応えられないことを伝えながら、７０％を６０％に、５０％にと少しずつ折り合いをつけられるようにしていったらどうでしょうか。

甘えと不登校の子どもの自立は、悩ましいことです。でも自分の心に折り合いをつけられることが成長を促し、人への信頼を取り戻す大切な経験です。

次回「カウンセラーを囲む会～思春期・子育て・学び合い～」は**１月１８日（水）**です